

【読楽】029 「さざれ石」を読む * 読楽箇所=本文より3通抜粋

女筆手本とは

●女筆とは

- ・女筆の時代=万治-宝暦(1658-1763)の約100年間
- ・「女筆〇〇」≠女性筆
(元禄6年『女筆四季文章』、天保10年『女筆花鳥文素』は男筆)
* 中村栄成書 * 内山松陰堂書

■女筆手本類刊行状況 * 141点は近年発見分を含む数字

	女 筆			男 筆		性別不明		合 計	手本	用文章	その他
	手本 ①	用文章 ②	その他 ③	手本 ④	用文章 ⑤	手本 ⑥	用文章 ⑦				
1650~99	15	7	0	2	2	1	1	28	18	10	0
1700~49	39	19	3	5	12	0	6	84	44	37	3
1750~99	20	5	3	17	36	0	20	101	37	61	3
1800~49	9	0	0	9	31	0	13	62	18	44	0
1850~99	0	0	0	1	12	0	21	34	1	33	0
合 計	83	31	6	34	93	1	61	309	118	185	6
性別合計	120 (* 141)			127		62			38.2	59.9	1.9

* 宝暦頃を境に「女筆から男筆へ」「手本から用文章へ」

●女筆手本類の分類

- ①性別…女筆/男筆
- ②用途…手本/用文章/その他
- ③形式…消息文/特殊消息文/非消息文

【手本と用文章の相違】

	手 本 芸術性を重視した書道手本	用 文 章 手紙を書くための例文集
目次や見出し	ないのが普通	あるのが普通
文字の大きさ	大きく、メリハリがある	小さく、均一的
連綿体の頻度	頻度が高い	頻度が低い
漢字の頻度	漢字が少なく、ルビなし	漢字が多く、ルビあり
文章の書き方	多く散らし書き	多く並べ書き
文章の特色	雅語・修飾語が多く、長文	簡潔な文章

■女流書家別出版点数

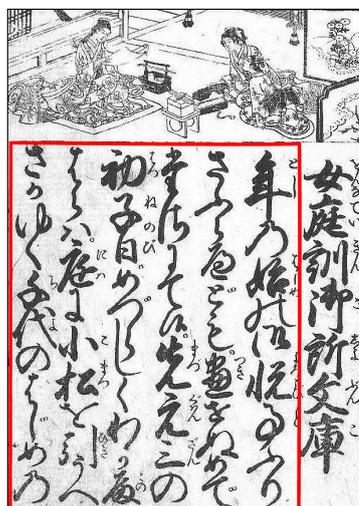
* 再板本除外、改題本別カウント

書 家	作品数 (割合)
①長谷川妙躰	26 (18.4%)
②居初 津奈	15 (10.6%)
③小野 通	9 (6.4%)
④沢田 吉	8 (5.7%)
⑤春名 須磨	5 (3.5%)
⑥長谷川 品	4 (2.8%)
⑥佐々木照元	4 (2.8%)
⑧長谷川 縫	3 (2.1%)
⑧窪田 やす	3 (2.1%)
⑩田むらよし尾	2 (1.4%)
⑩長谷川 (某)	2 (1.4%)
その他	60 (42.6%)
合 計	141 (100%)

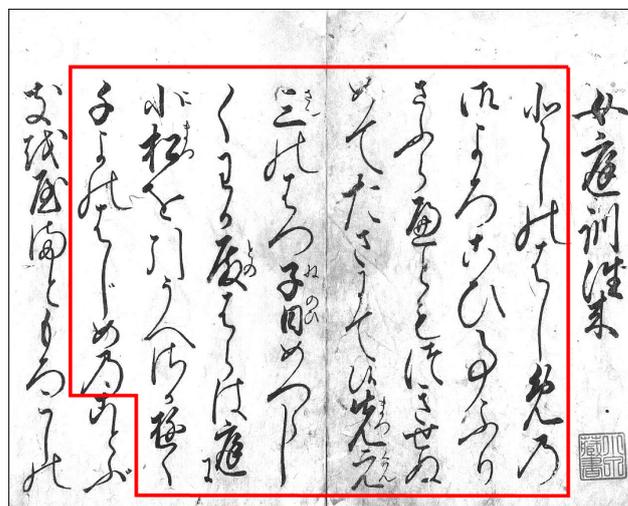
* 2009. 11改め



(C) 19c半



(B) 18c半



(A) 17c半

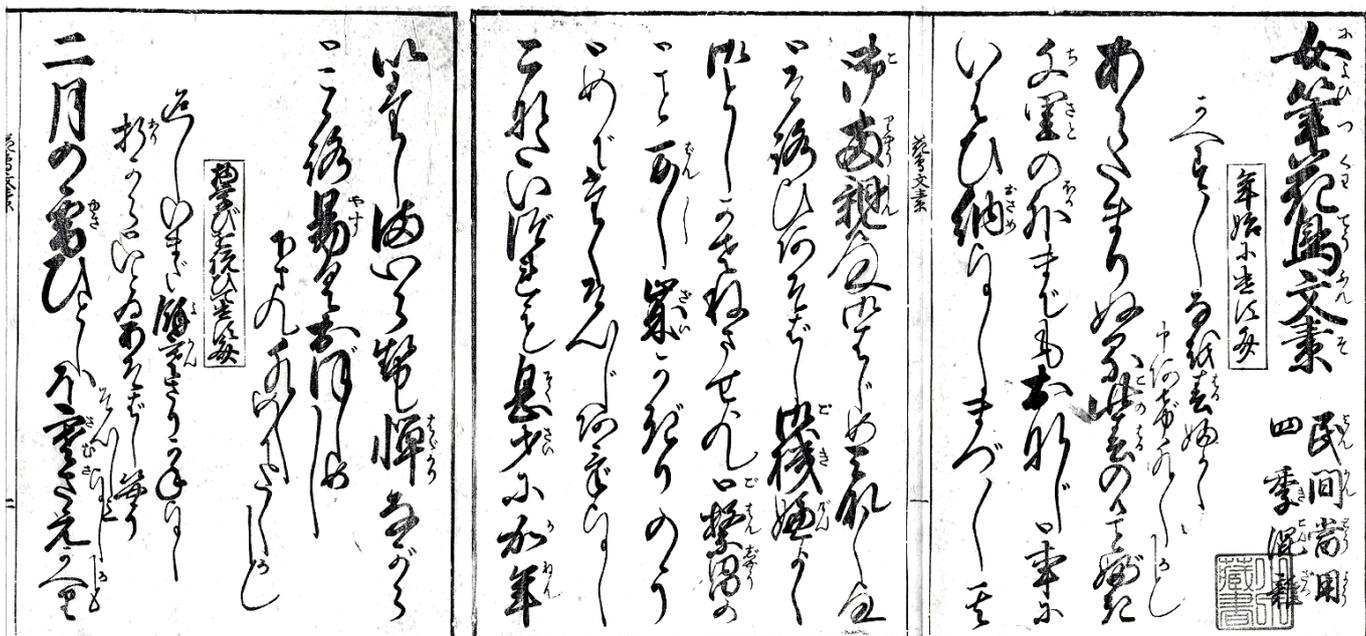
■手本の例——享保頃『女筆春日野』(長谷川妙 跡書) * 2段散らし書き



★この手紙はどんな内容でしょうか？

- ①御消息忝(かたじけなく)存まいらせ候。
- ②仰(おおせ)のごとく御寿さしゆび(首尾)よく
- ③相調まいらせ候て、御うれしく
- ④ぞんじまいらせ候。御祝儀と御ざ候て ←—— この位置で返し書き
- ⑤見事の箱重
- ⑥送下され、まことに
- ⑦相生(あいおい)の松之千代万代御はんじやう(繁昌)候て
- ⑧なを、さざれ石の岩ほとなるの
- ⑨御よろこび祝納(いわいおさめ)まいらせ候。めでたくかしく

■用文章の例——天保10年『女筆花鳥文素』(曲亭馬琴作、内山松陰堂書) * 並べ書き(2行返し書き)



★空欄は何と読みますか？

あらたまりぬる此の春の ① _____」千里の外までもおなじ御事に」いはひ納(おさめ)まいらせ候。まづまづ其御両親様御はじめ ② _____」御そろひあそばし御機嫌よく」御とし ③ _____御繁昌の御こと ④ _____かざりのう」御めでたくぞんじあげまいらせ候」こなたいづれも ⑤ _____」いたしまいらせ候。⑥ _____」御こゝろ易くおぼしめし」下され候べく候。(めでたくかしく)かへすがへすなを ⑦ _____」申あげ候べく候。かしく」

『さざれ石』を読む



【並べ書き】

けふの^{ねのひ}子之日に野辺の小松をもとめ
まいらせ候半にも、雪まの道おぼつか
なきころにて、御前の山なるを、玉
の^{うてな}台ながら千とせのかげと御覧
ぜられ候はゞ、たのもしさ御楽しみにて
候べく候。めでたくかしく

* 子の日^{はつね}の松 = 平安時代、正月初子の日に、野に出て小松を引き抜き、若葉を摘んで遊び、宴を設けた行事。小松引き。

* 玉の台ながら… = 美しく立派で、千年先まで栄え行く建物のようですと御覧になられたのなら…





【三段散らし書き】

(1) 星合之空も

はればれしく、天のは衣
うち重ぬる夜すゞしく、
千夜を一よになしたき

御事にて候半と存まいらせ候。

(返し書き) 返々御たむけの

(2) 心まで、戸わたるふねの

梶のはに露の玉づささげまいらせ
候て、
願ひのまゝの御悦、かしつるいと
のうちはへて、としのをながく
祝入まいらせ候。

其御ほどにも

しなじなのさげ物ども

(3) あそばし候半と

ぞんじまいらせ候。

ほんには御遊に御出

なされ候べく候。御物語申

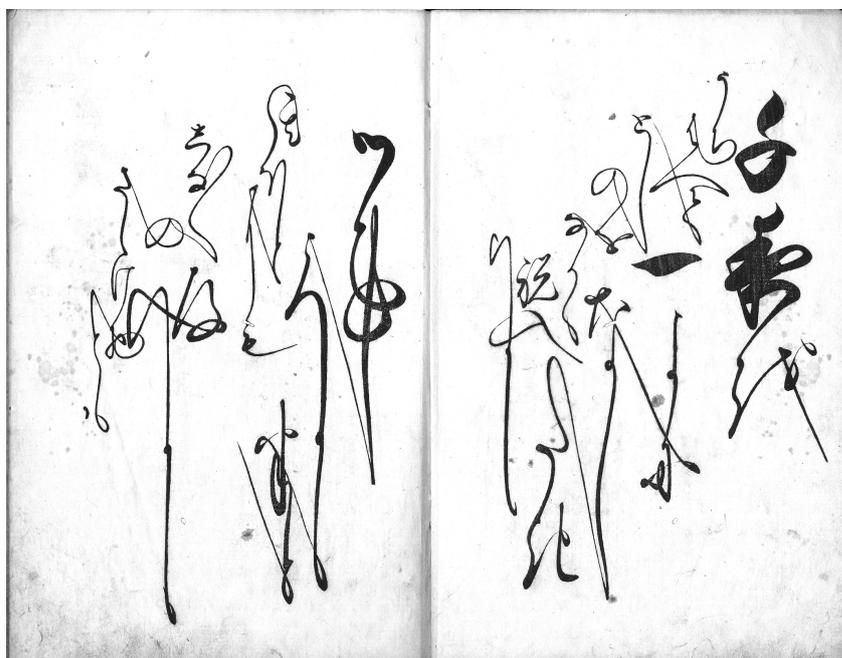
あげ候べく候。なをかさねがさね

めでたくかく

* 梶の葉 = カジノキの葉。昔、七夕の時に歌などを梶の葉7枚に書いて手向けた。

* 露の玉章 = 玉のように美しい手紙。

* かしつる糸 = 七夕に貸した糸。「七夕にかしつる糸のうちはへて、年のを長く恋ひや渡らむ」(古今和歌集、凡河内躬恒)を踏まえた表現。



★近くの方と相談して、太字の1段目の解説にチャレンジしてください。



【二段目】しのめ「水の」けぶりのた入まよりあらはれ／わたるあじる木にはしとあしとのあかき／しぎの大さしたるとりの／人にたじね候へば、沖のかもめども、

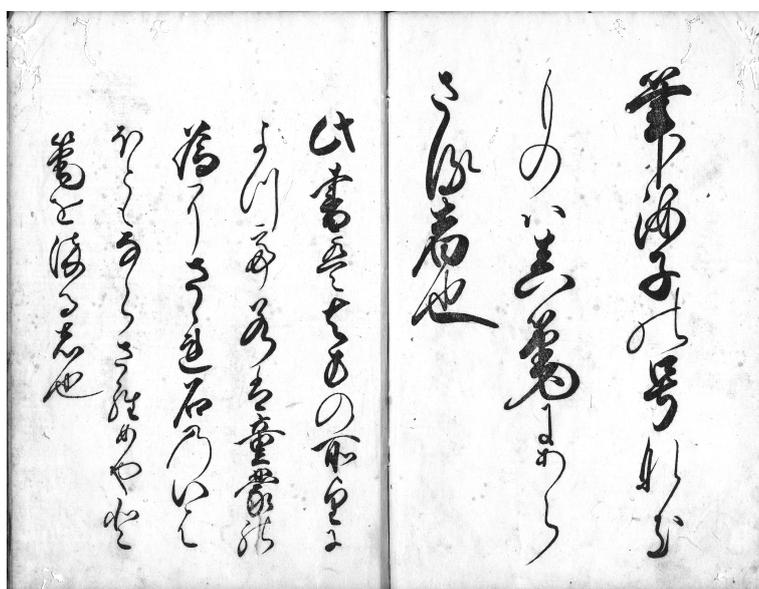
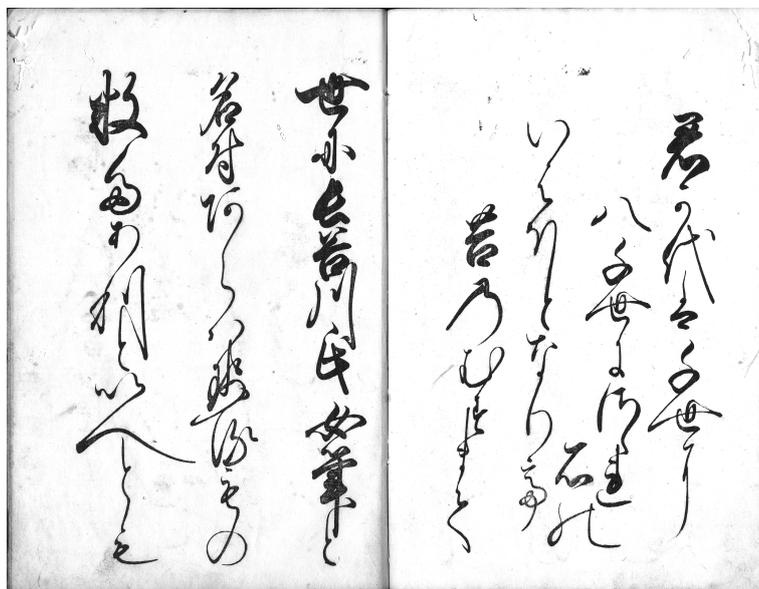
【三段目】都鳥ども、はをやすめいまいらせ候。かしへ

【末尾】お八千五もじ様 人々御申し給へ *五もじは「文字」御察人を示す女房言葉。中流町家婦人の敬称。

◆『さざれ石』の概要

- ・大本3巻3冊。長谷川妙躰(豊・筆海子)書。
- ・正徳3年(1713)刊。[江戸]万屋清四郎ほか板(三次本は、江戸中期(享保以降)再刊。[大阪]渋川与市ほか板)。
- ・時候挨拶の手紙や家族の近況を知らせる手紙など、種々の例文を散らし書きにした女筆手本。例文が分類整理されていないなど非実用的で、歌語を含む文体や奉書様式の書法の学習を旨とする。上巻は、「子の日」(新春)、「杜若」(初夏)の時候の手紙文に始まり、次いで、つれない相手を恨む内容の文、さらに物柔らかに僻んだ心を直せと諫める手紙文で終え、巻末に『古今』『新古今』からの和歌2首を掲げる。中巻は、初秋から冬にかけての情緒的な消息文で、「七夕」を題材とする前半は「星合の空」「梶の葉」などの歌語を配し、神無月を経て、「人めも草もかるるばかり」「野辺の冬草」「冬草のうへにふりしく白雪」と冬に至り、末尾に『和漢朗詠集』から抄録した和歌を掲げる。下巻は、家族が息災であることを詳述した後で、京都の名所旧跡と年中行事等を紹介する。各巻表紙見返に口絵を掲げるが、うち上巻見返の挿絵は妙躰の肖像画と思われる。

【備考】下巻末尾に「世に長谷川氏女筆と名付あらはせるもの数多ありといへども、筆海子の号なきものは真筆にあらざる者也」と記す。真贋の区別を強調し、類書を排斥するこのような断り書きをしつつ、己の署名の下には朱印も押す(個々の板本にそれぞれ押印)。板行された女性の著作では特異な例であり、当時、「筆海子」を名乗った女筆手本が巷間に回っていたことを物語る。妙躰の筆跡は従来の女筆手本には見られなかった衝撃的なものであり、たちまち京中の評判になったらしい。宝永元年(1704)刊『みちしば』跋文にも、『しのすゝき』が京都でブームになっていた事実を伝える。そんな折に、恐らくは妙躰の評判にかねてから注目していた京都書肆の要望に応じて、彼女は次に『わかみどり』を執筆、以後名声はますます高まり、複数の板元から多くの女筆手本を出版することとなった。さらに享保期には妙躰まがいの偽書が横行したため、ついに享保17年(1732)9月、一族の長谷川道柳が京都本屋仲間、妙躰流女筆手本の版下改めを願い出ており(『京都書林仲間』第5冊「上組済帳目」)、その翌年からは奥付に「筆海子の号なきものは真筆にあらざる者也」の一文が付されることになった。この時期は女筆手本出版のピークで、平均すれば毎年のように新しい手本が出版され、近世を通じて最も盛況だった。この頃に妙躰手本の類似品が出回り、妙躰手本の出版をめぐる書肆間の競争も激化したらしい。



長谷川妙躰——型破りな「生字」で女筆全盛期をリード

○事跡①:明和9年(1772)『女用文章糸車』前付

長谷川妙貞は其姓氏をしらず。いとけなきより御所に宮づかへせし時、妙喜尼といふ人に手跡を学ぶ事十二年なり。其後、御いとまを給はり、花洛の町に出て女子を集めて手跡を指南す。此時みづから妙喜尼の風を変して、一流の女筆を書出す。世に妙貞流と称し、例なき名誉を顕はす。近代にかくれなき能書なり。其書を評する者の云、「糸桜の春風に爛漫たるかごとし」といへり。

○事跡②:文化3年(1806)『女今川教訓状』序文

→「凡女筆の冠たるものなり」。

○事跡③:弘化5年(1848)『〈風俗〉名婦伝』記事

長谷川氏の娘は都の人なり。もとより二親に孝行厚く、和歌の道をよくす。中に筆道に達し、天が下に名を挙げしは、あまねく人の知る所也。今もなを長谷川流とて、女子の手習ふには此風を最第一とす。されば、流れを汲める者日に増し、弟子も大坂の橋の名におふ天満がき、長き代までも尊ぶは、をなごの誉れと申すべし。

○妙躰(妙貞)、貞(佐多)、豊、筆海子とも。京都四条の書家。御所

奉公引退後に京都で女筆指南。弟子に長谷川品、長谷川貞寿(長谷川縫・長谷川佐野も弟子か)。妙躰への改名(出家)は宝永4年(1707)～正徳3年(1713)の間。この頃を40歳とすると、延宝(1673～81)頃の生まれで宝暦頃没。*78歳まで生存(妙躰手沢本に「筆海子、長谷川氏、妙貞七拾八歳書」と明記 *次頁写真参照)

○元禄7年(1694)～宝暦3年(1753)の60年間で26点の女筆手本。*享保17年7月、長谷川道柳が類板防止の版下改めを要請(『京都本屋仲間記録』)

○独特な散らし書き → 画一的な御家流の型を破る女筆

■妙躰流の神髓「生字」(享保10年(1725)『錦乃海』)

「たとへば人の身にもほそき所、太き所、丸き所、平め成所有て、姿よくつり合候なり。面ていも高ひくなく瓜のごとく、手足もふとほそなく棒のごとくならば、生はたらく形にては有まじく候。其ごとく文字も点画のはり合有て、しかもふとき所にもたるゝ気味なく、細き所にぬかりたるよはみなきを生字と申候」

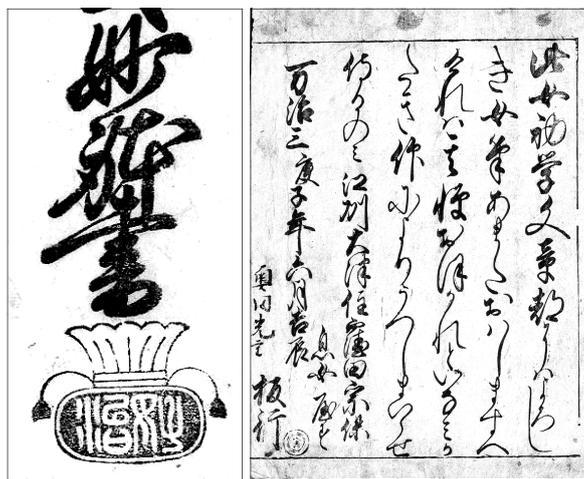
* 笹山梅庵作、元禄6年『手習仕用集』に「大概文字勢ひありて能動き靈魂あるは生字なり。是に反して、点画釣合に離たるを死字と云と心得べし。病字其中に有と老師申き」とある。

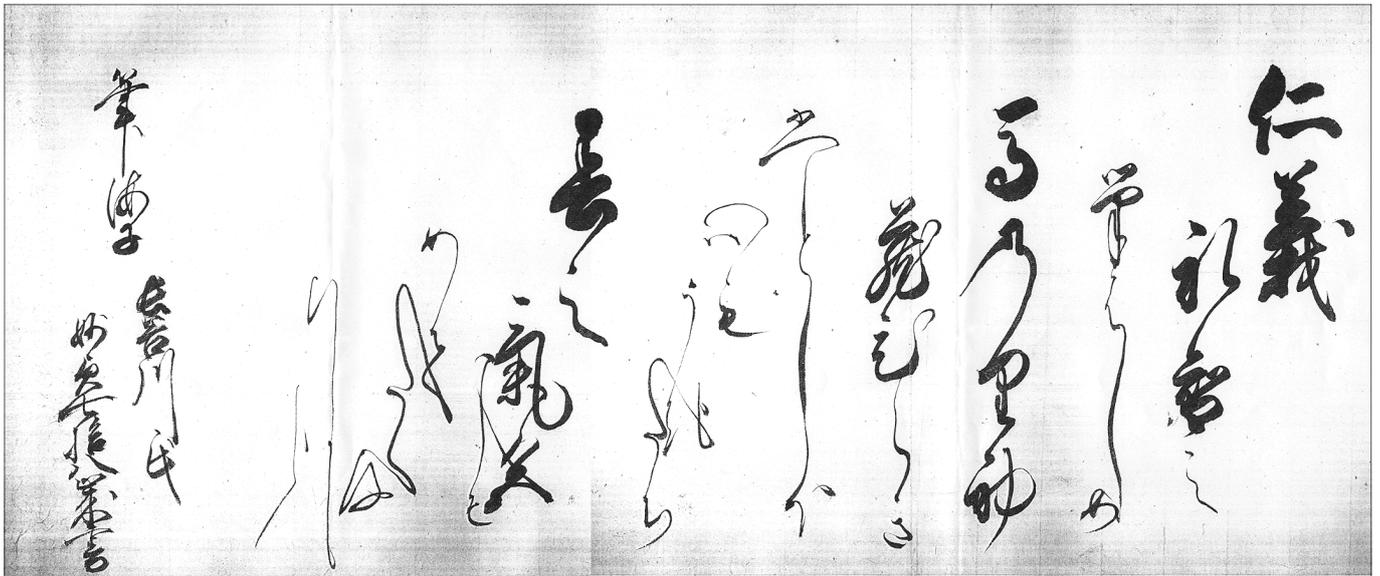
○津奈は、「点、引、捨、はねなどの所をながく書まじき也」(『女書翰初学抄』)と述べ、暗に妙躰流を批判。

* 宝暦9年『女千載和訓文』にも「もんじのすがたをやさしくかゝんとして、ちらしてよみがたきはぶれいななり。てん、ひき、すて、余りながくはひくべからず」とある。

○津奈と妙躰の共通点

- * 2人の年齢差は約30年(津奈が貞享～享保期、妙躰が元禄～宝暦期に活動)
- ・女筆指南と女性文化(女性語・女性書札礼・書道芸術)の創造と自己主張
- ・津奈は女文の「やさしさ」を、妙躰は女筆の「やはらかさ」を重視





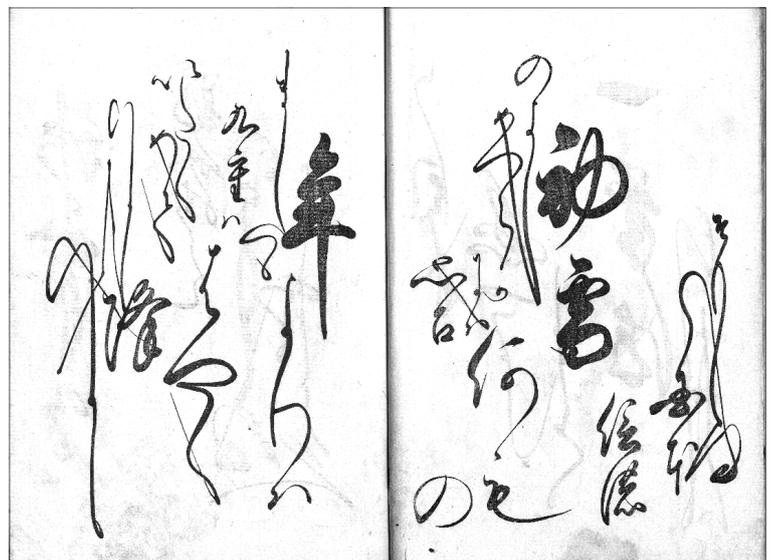
◆妙躰の著作

- (1) 元禄7年(1694)『しのすゝき』 → 改題本(2) 宝永6年(1709)『雲みの鶴』
- (3) 宝永4年(1707)『わかみどり』 → 改題本(4) 江戸中期『女筆若みどり』
- (5) 正徳3年(1713)『女文字宝鑑』* 妙躰筆か
- (6) 正徳3年『女堪忍記大倭文』 → 改題本(7) 明和5年(1768)『女文章色紙箱』
- (8) 正徳3年『さざれ石』 → 改題・増補版(9) 文化3年(1806)『女消息さざれ石』
- (10) 正徳4年『難波津』 → (同上*「さざれ石」+「難波津」)
- (11) 享保10年『錦乃海』
- (12) 享保14年以前『女筆春日野』
- (13) 享保14年以前『女筆君が代』
- (14) 享保14年以前×『女筆藻塩草』*「享保14年書目」で妙躰手本4冊の間に記載
- (15) 享保14年以前『女筆玉かつら』*「妙躰正筆目録」に載せるため、妙躰筆か(早大文学、筑波大「散らし書手本」所蔵)
- (16) 享保18年『蟬小川』
- (17) 享保18年『近江八景』
- (18) 享保18年『千代見草』* (19) 文政7年(1824)『〈女用〉千代見艸』(小本)あり
- (20) 享保19年『女筆指南集』
- (21) 享保20年『見寿乃雪』 → 改題本(22) 宝暦4年『女教倭文庫』
- (23) 享保20年『女筆続指南集』
- (24) 享保20年×『女筆続後指南集』(未刊)
- (25) 享保20年『女筆岩根の松』
- (26) 享保頃×『女筆百千鳥』* 明和5年『女中庸瑠箱』広告中に「長谷川妙貞筆」と記す
- (27) 宝暦3年(1753)『長谷川筆の錦』

※他に宝暦3年『女筆みよし野(三吉野)』?

*『女学範』『江戸出版書目』等は長谷川品筆とし、『大坂本屋仲間記録』および明和5年『女中庸瑠箱』広告は妙躰筆とする。

- ・妙躰の手本は約60年間出版され続けた。
- ・妙躰の手本は、筆跡の独自性に比べて内容面での特色はあまり見られない。



妙躰最晩年の作品、宝暦3年『長谷川筆の錦』